※A3版に拡大してお使いください。

2	
視　写	言葉の力をつけよう（新聞コラムの視写⑦） 佐賀新聞　有明抄「桜」
名　前	

新聞の第一面にあるコラム記事は字数が限られているため、段落を改める箇所を各社の決まりを設けて表記してあります。「佐賀新聞」の「有明抄」では段落を改める箇所では、句点「。」と改行をまとめて◆で示してあります。「有明抄」の◆部分は原稿用紙の書き方に従って、句点「。」を付け、改行して視写しましょう。

やってみよう

有明抄「桜」

あちこちで桜の花はほころび始めているのに、異常気象のせいか、雨の日が続いた。開ききらずに散る桜の姿を想像して、心穏やかでなかった人も多いだろう。その無情の雨もやっとおさまった。週末は天気も回復し、絶好の花見日和となりそうだ◆雨が上がった昨日、佐賀市の神野公園駐車場に車を止め、多布施川沿いを歩いた。公園内の桜はまだ三分咲きだったが、川辺の桜はもう満開に近かった。水との相性がいいのだろう。流れに吸い寄せられるように、川面に花を付けた枝を伸ばしている◆年老いた木もあった。こけむした幹の中は腐れて空洞になりながらも、精いっぱいみずみずしいピンクの花を咲かせている。このけなげさ、花の命の短さが、多くの日本人の心を動かしてきた。桜を歌った詩歌には名作が多い。いくつか胸にとどめて見れば、花の景色も変わってくる◆「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」。在原業平（注）は、桜の花を胸の高鳴りを抑えきれない恋人のようにとらえている。近づいてみれば、色もはっきりしない白い花だが、人の心を波立たせるような不思議な魅力がある◆詩人の三好達治は「あはれ花びらながれ／をみなごに花びらながれ／をみなごしめやかに語らひあゆみ／うららかの跫音（あしおと）空にながれ」とうたった。当時三好は東大の学生だった。青春の華やかさとはかなさが、流れる花びらと女の子たちの歩みから立ち上がってくる◆若い人たちも桜には格別の思い入れがあるようだ。森山直太朗の「さくら（独唱）」、ケツメイシの「さくら」、コブクロの「桜」とどれも名曲だ。なぜこれほど桜は人の心を騒がすのか。花の盛りに花の下に立てば、答えが見つかるかもしれない。

佐賀新聞　平成二十二年三月二十六日付　一面

注　在原業平…平安時代の歌人。六歌仙の一人。

760字　600字　400字　200字

2

視　写

言葉の力をつけよう（新聞コラムの視写⑦）

佐賀新聞　有明抄「桜」

名　前

解　答

　あちこちで桜の花はほころび始めているのに、異常気象のせいか、雨の日が続いた。開きき らずに散る桜の姿を想像して、心穏やかでなかった人も多いだろう。その無情の雨もやっとおさまった。週末は天気も回復し、絶好の花見日和となりそうだ。

　雨が上がった昨日、佐賀市の神野公園駐車場に車を止め、多布施川沿いを歩いた。公園内の桜はまだ三分咲きだったが、川辺の桜はもう満開に近かった。水との相性がいいのだろう。流れに吸い寄せられるように、川面に花を付けた枝を伸ばしている。

　年老いた木もあった。こけむした幹の中は腐れて空洞になりながらも、精いっぱいみずみずしいピンクの花を咲かせている。このけなげさ、花の命の短さが、多くの日本人の心を動かしてきた。桜を歌った詩歌には名作が多い。いくつか胸にとどめて見れば、花の景色も変わってくる。

　「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」。在原業平は、桜の花を胸の高鳴りを抑えきれない恋人のようにとらえている。近づいてみれば、色もはっきりしない白い花だが、人の心を波立たせるような不思議な魅力がある。

　詩人の三好達治は「あはれ花びらながれ①／をみなごに花びらながれ／をみなごしめやかに語らひあゆみ／うららかの②跫音（あしおと③）」がってくる。

　若い人たちも桜には格別の思い入れがあるようだ。森山直太朗の「さくら（独唱）」、ケツメイシの「さくら」、コブクロの「桜」とどれも名曲だ。なぜこれほど桜は人の心を騒がすのか。花の盛りに花の下に立てば、答えが見つかるかもしれない。

760字　600字　400字　200字

① 本来なら改行すべきところを、紙面の都合上、続けて書くという意味で、／で区切って書く場合があります。

② 点画に気を付けて書きましょう。

跫

音　キョウ

訓　あしおと

③ 行のはじめに　）がこないように、文字ととじかっこを一つのますに入れます。

◆の所は、　。（句点）を付けて、改行しているかな。